

日本を 考える

⑧

済大国である日本は我々の手本だ」と言う。

「我々の手本」

イラクに派遣されたのは3年前になる。復興支援活動の成果が、イラクの人たちの表情に出たり、町の様子に表れたりする。国益の最先端の現場で、非常にやりがいがあった。当時、痛感したのは国の大切さだ。

イラクは、国家の運営がうまくできなかった故に、戦乱で町が破壊され、秩序が乱れた。イラク人の生活、心にも影響を及ぼしていた。翻って、日本という国の素晴らしさを再確認した。とても豊かで、とても美しく、とても安全だ。

イラク人から「日本は先の大戦でアメリカと戦って負けた。我々と一緒だ。アメリカに負けて、どうやって日本みたいになれるのか」と質問され、はっとしたことがある。彼らは「経

元陸自イラク復興支援群長 番匠 幸一郎さん

武士道の継承
イラクで英軍大佐と話を



素晴らしい国 自信持って

アメリカ人やイギリス人、オランダ人らと接する中で、日本が重要な国と見られていることを実感した。我々は「日本が大国で、素晴らしい国だ」と、もっともっと自信を持ってい

た時のことだ。ボスニアなどで国際任務をした大佐は「人道支援などで成功する部隊と失敗する部隊はすぐ分かる。人道支援のためだけの装備、気構えの部隊はだいたい失敗する。簡単な任務でも軍事組織としての構えを維持し、訓練をしっかりとやった部隊はびくともしない」と語った。

自衛隊が軍事組織としてやってきた訓練は、間違っていない。指揮官は命令を発し、部下は復命・復唱する。時間を厳守して行動する。規律正しくやる。基礎的なことが大事だとイラクで再確認した。脈々と訓練、教育を受け、鍛えられて、自衛隊の今がある。我々は先輩が作り上げた財

産だと感じている。今、九州(の西部方面隊)にいるが、万葉の時代から防人がいた。侍の時代になり、明治になって軍人と呼ばれる時代があり、1950年には自衛隊の前身の警察予備隊が創設された。我々は今、自衛官と呼ばれる。制度や任務は時代と共に変わっても、国を守るために

かつて外国で行ったことを勉強した。例えば、義和団事件で、日本軍は近代国家になって初めて多国籍軍の一員として活動し、世界を驚かせた。何が驚かせたかと言うと、日本軍の規律正しさ、訓練レベルの高さ、勇敢さだ。そういう評価は時代を超越して残る。当時の日本の軍人たちが背筋を

伸ばし、堂々とした姿で写っている写真を見ると、伝統を継承する者として誇りに思う。いろいろな評価はあるだろうが、みんな、その時点ではベストを尽くそうとした。時に成功し、時にうまくいかなかった。大事なことは、我々がそこから何を学習するかだ。私たちが「未来の後輩に見られる」という意識を持ち、後輩に恥じない仕事をしないといけない。この時代に生きる者としての責任をしっかりと果た

したい。愛情の積み重ね 自衛隊には、部隊の規模に応じて指揮官がいる。イラクにいた時、私は派遣部隊の指揮官として、部下の隊長だけを把握していればいいわけではない。部下は600人全員だ。中隊長は100人に責任を持つ。小隊長は30人に責任を持つ。分隊長は10人に責任を持つ。その「糸」がたぐさん重なる。私は接する一人一人との関係を大事にしようと思がけている。なかなかできることではないけれど。こう言うのは恥ずかしいが、大事なことは愛情ではないだろうか。私は隊員がかわい。だからこそ、いい仕事をしてほしい。部隊もそう。我々はいつも同じポストにいる訳ではなく、数年ごとに交代するが、今よりいい状態で部隊を後輩に申し送りたい。今いる我々は、全力を尽くして部隊を鍛え、即応性を保ち、任務に対応できる状態にす

ばんしよう。こういうふうに 陸自補。陸上自衛隊西部方面隊幕僚副長。2004年1月、陸自第1次イラク復興支援群長に就任。サマワで復興支援活動を指揮した。同年5月に帰国後、陸幕広報室長などを務めた。防衛大学校卒。49歳。

た。防衛大学校卒。49歳。

た。防衛大学校卒。49歳。

た。防衛大学校卒。49歳。



義和団事件 中国・清代末期の1900年、欧米列強などによる中国支配に反発した秘密結社「義和団」が北京の各国公使館を襲撃した事件。日本軍を中心とする米英露など8か国の連合軍が鎮圧した。清は多額の賠償金を支払い、これを機に清の半植民地化が進んだ。日本では「北清事変」とも呼ぶ。

(聞き手 田中隆之)